

「生き抜け、その日のために」～長崎の被差別部落とキリシタン～

著：高山文彦

数年前に長崎を訪れる機会があった。

一般的に有名な観光地でもある「グラバー邸」や、最近話題になった「軍艦島(端島)」にも行くことが出来た。その時に、長崎の街中を散策するコースがあり、裏通りを散策しているときでした。住民の方に道を聞きながら歩いていると、小さな川が流れているところで「この川は、昔は牛や馬などの皮を洗っていた川だ」と聞きました。その人に出会わなければ、聞けなかったことなのですが、何かつながりを感じた出来事でした。その後、長崎の被差別部落について知りたいと思っていました。

長崎で原爆が投下された爆心地には、浦上という被差別部落がありました。

その被差別部落で生まれた磯本恒信は、実の母親に「浦上で生まれたと言うちゃならんとばい」と言われます。

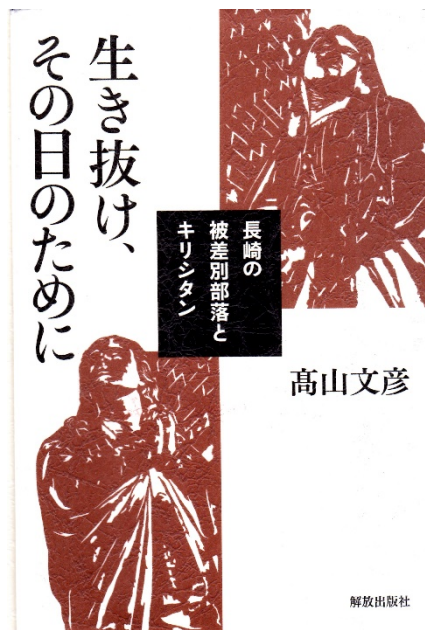
同じ被差別部落で生まれた中尾貫は、教師の仕事を進められ、9年間を五島で過ごし、隠れキリシタン里で、隠れキリシタンの末裔と出会い、キリシタンの歴史を学び、長崎にもどります。

長崎の歴史には、キリシタンへの厳しい差別の歴史がありました。

磯本は、浦上の歴史を調べる中で、部落は差別をうけてきたが、自分たち部落の祖先は、権力の手先になって、キリシタンを捕まえて、拷問にかけたり、殺してきた。権力の側にいいように使われたのかもしれないが、キリシタンにしたらそういう理屈は通らない。キリシタンとの歴史的問題をなんとか解決していく方法はないかと、中尾貫に伝え、共に取り組みます。

その後、スペインから来て、日本に帰化したディエゴ・パチェコ神父(日本二十六聖人記念館を開館)と、1979年に起きた、世界宗教者会議での差別発言をきっかけに出会い、磯本は自分の出自を明らかにし、長崎にはないとされていた被差別部落の存在を公に認めさせ、差別撤廃の運動に前のめりになり、2人と共に、被差別部落とキリシタンの歴史的和解をめざします。

本のタイトル「生き抜け、その日のために」は、松本治一郎が、主人公の1人の「磯本



恒信」に贈った言葉ですが、本書のあとがきで、著者高山文彦氏は、「キリシタンと被差別民の相克、すべてを焼き払う原爆の悲惨、そうした辛苦の運命を生きてきた長崎という特異な都市の歴史において、静かな祈りのように、重ねられてきた『その日』を願う人びとの粘り強い生き方を記録しておきたかった」と書かれています。

全国にある、被差別部落には、その地域によって、様々な歴史的経過があると思いますが、その1つと出会うことが出来た1冊でした。

被差別部落とキリシタンとの歴史的関係について、初めて知る機会となりましたが、長年取り組んでも、なかなか解決しない根深い問題だと実感しました。

長崎でのこの問題は、未だに解決出来ていない問題ですが、その現実を知り、私たちひとり一人の問題として、学び伝えていく必要があると思います。